

---

# 魔女の胸に抱く剣

篠田 一郎

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

魔女の胸に抱く剣

### 【Nコード】

N1966A

### 【作者名】

篠田 一郎

### 【あらすじ】

魔王の娘アメリカは、超絶破壊兵器「魔剣」を、破竹の快進撃を続ける勇者より先に手に入れるため、旅に出る。だが……

## 前章（前書き）

わりとありがちな話かもしれませんが、  
お付き合いいただければ幸いです

魔女の胸に抱く剣

## 前章

あたしの胸を締め付けるもの、それは、怒りと哀しみがないまぜになったやるせなさ、だった。

なぜパパもおじ様も兄様もわかってくれないのだろう。

鏡の中にいるあたしは、燃えるような真っ赤な髪を、乱暴にくしけずった。

頬に残っている痕、それは兄様にぶたれた痕。全然痛くない、けど心に響く傷跡。あたしの痛みを思っ手加減するのなら、兄様に叩かれただけで切なくなるこの気持ちも、一緒に理解してくれればいいのに。

天蓋のついたベッドへ入っても、しばらくは眠れそうにない。ただ黙って、じつと、鏡に映るあたしを見つめる。本心を言えば、いつもは美人だと思う顔、だけど今は、醜い顔。

「アメリカ、いるかい」

パパの声と同時に、廊下と通じる扉がごんごんと叩かれた。分厚い樫の木の扉は、軽くノックした程度ではびくともしない。頑丈なのは、敵の侵攻を想定した防御策の一環だ。

無言でいると、やがて扉が静かに開いた。

「アメリカ、いるのならいると言いなさい」

娘が言うのもなんだか、パパはなかなかに渋い。だから、鏡の中にいるパパへ、心の中で語りかけた。そんな情けない顔しないで、と。

「さっきあいつがお前をひっぱいたのは、アレだ、お前があんまり興奮しすぎたからだ。他意はない」

「わかっているわ、そんなこと」

「うん、それならいいんだ。あー、しかし、なんだ、お前の考えは、ちよっと過激すぎると、パパも思うぞ」

「だって、現状を見れば、あたしの主張が正しいのはあきらかだわ。

なのに、みんな、なんでそんなに呑気でいられるの？」

鏡に映ったパパが、洪面を作っている。

みんなそうだ。

あまりにもあきらかなのに、現実を認めようとしなない。

だけど、そうこうしているうちに、この城にまで敵はやってくる。

「初めから無理だったのよ。魔物と人間の共存なんて」

そう。

人間と魔物が協定を結んだのは五年前。それまで合い争ってきたお互いの軍が解体され、世界中で両者は共存を始めた。だが。

「やつらの侵攻はとどまらないわ。協定なんて無視。なのに、まだパパは話し合えばわかってくれるとか、そのうちやつらも冷静さを取り戻すとか」

「しかしな、やつらと言ってもごく一部の過激派が……」

「パパならやつらを退治できるでしょ！？ 出て行ってさっくり倒しちゃってよ、あの勇者一行を！ 歴代最強の魔王なんだからできるでしょ!？」

「そんなこと言っても、な、アメリカ。人間どもの一部の過激派でも、魔王が退治してしまうと、後が面倒なんだよ。いろいろ、外交とか政治的に問題なんだ」

「なに言ってるのよ！ じゃあ、やつらが魔物を殺戮してるのは、問題じゃないっていうの？」

「そうは言っていないよ。だから、おだやかに説得を」

「説得に行った將軍は、名乗りをあげた途端に、問答無用でぶち殺されちゃったじゃない」

「これ、そう物騒な言葉を使うものではない」

「勇者め、やさしかったおじさんを」

あまり強くないがやさしかった將軍の顔を思い出して、あたしは涙が出そうになった。

いけない、興奮すると涙もろくなるのだ。

「早く手を打たないといけないの。やつら、解放とか称してどんどん支配地域を広げていつてる。もともと、街の中に住む人間と、自然を愛し自然の中に暮らすあたしたち魔物と、それなりの住み分けはできていて、大規模な衝突なんか起きなかつたのに」

「それは、まあ」

「勇者は金目当てで弱い魔物を殺し尽くし、遺体を野ざらしのまま放置させて、朽ちていくままに放っておく。魔物だって人間を殺すけど、それは自己防衛だったり、他にコミュニケーションの手段を知らない、知能の低い種族がたまに暴れるだけなのに」

そうだ、やむにやまれぬ事情、理由がある。なのに。

悔しさで手が震えた。

「やつらは、わけのわからない屁理屈で大量殺戮を平然とやる。一人の人間のために、百や千の魔物を虐殺して、それで平気なのよ！」

一刻の猶予もないの。今もきつと、人間のためのイデオロギーで勝手に悪とみなされた魔物たちが、容赦なく駆逐されているはずだから。

「少なくとも、あの勇者たちはなんとかしないと」

「うつむ」

鏡に映るパパだけでは飽き足りず、あたしは振り返った。

魔王は、困りきった顔で腕を組んでいた。

「勇者たちは、人間の間ではなかなか人気がある。やつらは、その人気に便乗して好き勝手やってるわけだ。つまり、この、民衆からの支持、というやつをどうにかしないと、また大規模な戦争になる可能性が」

「あたしたちにとっては、勇者との戦いはすでに戦争よ！」

「だいたい、とあたしは頭の中に世界地図を思い描く。」

「あいつら、着実に近づいているわ。立ちほだかるつもりなんかない魔物を、背後から襲ってでも根こそぎなぎ払いながらもあそこに向かつてる」

あたしの言いたいことは、パパにも即座に伝わったようだ。  
「魔剣の封印せし地、か」

脅威の貫通性能、奇跡の殺傷能力、無敵の破壊力。

その剣は、名剣という言葉さえも色あせて相応しくないほど、あまりにも強力すぎた。鍛えあげた鍛冶屋がびびって逃げ出したほど凄かった。

鍛冶屋は、名匠という名誉を逃してしまったことになる。

彼の鍛えた剣が、のちに「魔剣」とか「聖剣」と呼ばれ恐れられたのだから。

人間も魔物も、魔剣のあまりの破壊力に恐怖し、これをもてあました。

一振りで山の形を変えてしまう破壊力を持つ携行武器を、平然と持ち歩ける者がいるだろうか。本人も周りの者も怖くてしようがない。頭のネジのイカれた馬鹿なら平気かもしれないが、周りが絶対許さないはずだ。

そんなわけで、人間と魔物の両者の力によって、魔剣は封印された。

その場所が、「魔剣の封印せし地」

「勇者に魔剣。鬼に金棒よりずっと強力よ」

「だから説得を……」

「封印だなんて甘だったのよ。叩き折ってやりゃよかったのに」「もったいなかったのだよ。危ないものだけど、捨ててしまうのもどうか、と。強力な武器って、あるだけで、なんとなく安心だろう?」

「とてつもなく不安よ!」

なんでパパはいつもこうなの! もっと現実を見てよ。こんな

じゃ、魔王の力なんて、宝の持ち腐れじゃないの！

「……………しかたがないね、アメリカ。決着はつきそうにないから、この話は、また今度にしよう」

それじゃ遅いんだって、パパぁー。

「おやすみ、アメリカ」

夜半。

あたしは、フル装備で城を抜け出した。

ガキの頃から住み慣れた城だ、抜け道、隠れ場、警備の隙は隅から隅まで熟知している。

あたしはやる。

勇者が魔剣を手にする前に、あたしが封印を解く。

勇者の手には渡さない。

あたしは、自分の手で自分の不安を解消するのだ。

## 中章

勇んで城を抜け出したのが二週間前。

魔物はみんなあたしの味方。だから、逃げる魔物をいちいち追いかけてトドメを刺す勇者たちより、早くあの地に着けるはず、だったのに……

「なー、アメリカ」

勇者が、にこやかになにごとか話しかけてくる。どうせいつもと同じ、下ネタか親父ギャグか金の話かメシの話だろう。

無視していても、なーなー、と猫のようなしつこさでまとわりついてくる。

なぜ、あたしはここにいるの？

勇者様ご一行魔法剣担当メンバーって、どういう肩書きなのよ？

「アメリカはいつも怒っているのだな」

「しッ、キャラ作りというやつです。突っ込んではいけない、というのが暗黙のルールです」

戦士と僧侶がわからんことを言っている。

「おい、ばあさん、置いてくぞ」

「……年寄りふあ、もうしゅこし、大事に」

「くたばったら死体は置き去りだ、ほら、歩け、一、二、一、二」

女武道家が魔法使いのばーさんを無責任に急かしている。

あたしの背後には、出会ってからずっと忍者がへばりつくように歩いていて、一瞬でも隙を見せられない。

こいつらか。こいつらが勇者パーティーか。この阿呆どもが。

こいつらと遭遇したのは、数日前だった。

森を出た途端に出会った、妙な構成の旅人たち。

今まであたしは、人間の旅人と問題を起こしたことがない。あた

しのような純粹な魔物は、外見は人間と変わらず、体内構造もほぼ同じだ。だから、自慢の美貌でにっこり微笑むだけで、問題どころか、ちやほやされてメシも薬草もいただき放題なのだ。

今回も、同じ要領でにっこり笑った。

「女だー！」

男たちの一人 後で聞いたところ、こいつが勇者だったわけだが、そいつがいきなり突進してきた。

「しかも美人だー！ 俺ついてる、超ラッキー！」

勇者の後ろから戦士と忍者まで走ってくる。

わけがわからないうちに、あたしは押し倒されていた。

わ、ズボンを脱ぐんじゃない！

「お、おい、俺が先だぞ、勇者なんだかな！」

「なにを言うか、年長者が先だ」

「拙者、早きこと風のごとし。お待たせいたしましたせぬぞ」

どこの世界にいる！？ 女を見た瞬間に襲いかかる勇者が！

とんでもない馬鹿力で抱きつかれ、ふりほどくこともできない。

助けを求めて勇者の背後を見ても、物ほしそうにしてる僧侶も、

ニヤニヤ笑っている女武道家も、今にも死にそうなばーさんも、誰も手を差し伸べてくれそうにない。

キスキス、俺とキスしゆるのー、と迫ってくる勇者の顔を見て、頭の中でなにかがプチ切れた。

「いい加減にしるおツ、死イねやオラあ！」

あたしとて魔王の娘、魔力と怪力には自信があるが。

戦士と忍者は吹き飛ばしたものの、胴体にへばりついて体の匂いを嗅いでいる馬鹿だけは、どうしてもはがせなかった。

この馬鹿力め！

本気で破壊魔法でも唱えようとしたその時、あたしの視線が勇者の腰にすいついた。

これは、魔剣！

間違いない。魔剣の封印する地へ「社会見学」と称して遊びに行った時、あたしはこの剣を見ている。

予想以上の非常識な侵攻速度でもって、勇者たちはあたしの知らないところで先を越していたのだ。

魔剣に最も触れてはならない者が、魔剣を手に入れるなんて。

あたしは一気に脱力した。

けっきょく、表向き禁欲しているため行為に参加できず、やきもきしていた僧侶が止めに入ってくれて、あたしの純潔は守られた。

「しっかし、ここ数日、めっきり魔物の数が減ったなー」

勇者が残念そうにつぶやく。

当然だ。あたしが使い魔を放って、勇者の予想進路を魔物たちに知らせているのだから。

「つまんねえよなー。この辺の魔物って、そこそこのいい金もってんだろ？ レアアイテムも持ってたよな、たしか？」

あたしに聞かないで。

「魔剣も、この威力じゃそう簡単に振り回せねーしなあ」

わかってるんなら、なんであたしの目の前で山を一つ吹き飛ばしたの？ 「俺って、すげーだろ」 じゃないわよ、この破壊衝動妄

動症め。

一人では勝てない、とわかった。もしかしたら、パパでも。

変化する地形と巻き添え食う生命を無視できるのなら、魔剣の威力を存分に発揮できるフィールド上では、この馬鹿に勝てる者などいない。

だから、人間のフリをして誤魔化そうとした。逃げようとした。なのに。

ほとんど拉致同然の手口で、あたしはパーティーに組み込まれた。まあ、一緒にいる女が、並みの男より男らしい武道家と、しなびたばーさんだけだから、華がほしいと願うのはわかる。あたしの美



あたしはなにをやっているの！？  
なぜ、あたしは……………

翌日には城へ着く。ここは、最後の宿場町。

深夜、ベッドでだらしなく爆睡する勇者の枕元に、あたしは立っ  
た。

思い浮かぶのは、商隊をよだれ垂らして見送る勇者、魔物にトド  
メを刺すべく走り回る楽しそうな勇者、初めて会った時、あたしへ  
襲いかかってきた勇者。

瞬間的にあたしへ突進してきた決断力と瞬発力、  
迷うことなくあたしの服に手をかけた行動力、

一度抱いたら離さない脅威の執念と、けたはずれの馬鹿力、  
なにより、キスキスキスー、と迫ってきた彼の目に光る、欲望に  
まっすぐな純粹さ。

枕元にある魔剣をそつと奪い、きゅっ、と胸に抱きしめた。

あたしごときの腕では、一振りすることすらできない剣。だが、

このまま持ち出せば、少なくとも勇者の力は半減だ。

それがわかっていて、今まで行動に移さなかった。

パパ、あたしの行動は、正しいと思う？

心の中で、魔王へ問いかけた。

## 終章

いよいよ魔王の城を前にして、さすがにパーティーは緊張していた。

戦線を離れたばーさんに代わり、魔法攻撃担当はあたしだ。

前もって使い間で知らせておいたから、魔物たちは、あたしの派手だけど殺傷力の低い魔法で、ぶっ倒れる演技をしてくれるはずだ。扉の前で、勇者は言った。

「愛してるぜ、アメリカ」

今までの旅を通して、初めて聞いた告白だった。

後ろの方で、俺も拙者も、という声が聞こえるが、あたしの目は勇者しか見ていなかった。

「ありがとう。でも」

「お前が魔物でも」  
ギクツとした。

まさか、バレていた！？ 本能のままに動く昆虫並みの馬鹿と思つて、油断していた。

身構えたあたしの肩を、女武道家が軽く叩いた。

「事情があるんだろ？ いいさ。とち狂った野郎どもを抑えてくれだし、ばーさんも預けてくれた。あんたは仲間さ。城の中に罠があれば、ブチ破るだけだからね」

「拙者は最初から気付いて」

「嘘つくな、へっばこストーリーカーめ」

なんだろう、この一体感は。

不思議だ。これが、破壊衝動妄動症に取り付かれた一群なのだろうか？

あたしは、静かに、開かれる扉を見つめた。

あたしへの遠慮なのか、勇者たちは魔物へトドメを刺さなかった。どんな魂胆があるのか、と冷静に観察したが、他意はないらしい。……人間って単純ね。

いや、このメンバーが単純なのか。

そうして、あたしたちは、簡単にパパの玉座まで進むことができた。

「よく来た、勇者よ。ものは相談なのだが」

「貴様の仲間などにはならん！」

「いや、そうではなくて、双方歩み寄りが大事かと」

「勇者ここにありー！」

パパの説得には一切耳を貸さず、勇者は斬りかかっていた。

やっぱり、反射神経だけで生きてる昆虫並みの馬鹿ね。

ザッツ、とパパの周囲を護る兵士たち。中には、おじ様も兄様もいた。

激しい戦闘が開始された。

勇者は、城内ということ、破壊力のありすぎる魔剣ではなく、普通の剣で戦っている。それでも、パパと実力伯仲だ。

他の仲間の戦いは、あたしが適当に、

背中に当たって「あ、ごめん」

足をひっかけ「あわわわわわ」

体当たりかまして「このブスが」

と、妨害やりまくりのため、双方に被害はない。

経験の差か、パパを攻めあぐねた勇者は、「かくなるうえはアツ」と珍しく小難しい言い回しで叫んだ。

「どおなつても知イらねーエぞお！ 城もろともブチ壊してやるツ！……！」

これには、仲間からも制止の声があがったが、馬鹿は無視して魔剣を抜いた。

勇者はすべての動きを止めた。

プッフッフッフッフッフ、アハッ、アハッハッハッハッ！

馬鹿だ、ここに馬鹿がいる！

最終決戦の前に、最終兵器の確認ぐらいしとけ、この愚か者が！  
取り替えてやったわ。

ケケケツ、鞘と柄だけの刃のない偽物と、魔剣を取り替えてやったあ。

街に寄ったのは、ばーさん預けるためだと思ったでしょ？ この能天気馬鹿勇者め。

使い魔通してパパに頼み、あの街の鍛冶屋でレプリカ作ってもらっていたのよ。

本物の魔剣は、昨夜、きゅっ、と胸に抱いて持ち出し、十キロほど走った場所に埋めてきた。魔剣なんて腐れて朽ち果ててしまえばいいのよ。

深い、とてつもなく深い穴を掘ってやったからね。

スコップ両手に土を掘り返していくうちに、様々な雑念が消えて心が澄んでいった。

世界平和の実現、政治的理由、パパの顔兄様の顔が順番に消えた。残る思いは一つ。

刃のない、鞘と柄だけの魔剣のレプリカを土壇場で見て、勇者がどんな阿呆ヅラさらすのか。

それが見たくて、想像すると笑いも止められず、うひゃひゃひゃひゃと笑いながら全精力を傾けて穴を掘った。

そう、その顔を見るためよ、もっとよく見せて、馬鹿勇者。

本来柄から伸びているべき刃が、ない。刃のあるはずの場所を呆然と見つめていた勇者は、二、三度意味なく剣を振り回し、首を傾

げて、鞘の中を覗いてみた。やはり刃がない。鞘をひっくり返して振ってみるが、やっぱり出てこない。

何度も何度も首をひねってみる。

魔王を見やり、ニセモノを指差して、不思議そうに疑問の視線を投げかけたりする。

いいわ、そうよ、その間抜けヅラが見たかったのよ！

あたしが貴様のためにどれだけ苦労したか、この、阿呆の分際で！

「そういうことだったの!？」

あたしは、ひとしきり彼の間抜けっぷりを堪能してから、勇者に抱きついた。

「その剣が、あなたの決意だと言うのね？」

「あッ、いや、これは」

「魔剣を分解してまで、あたしへの愛を貫いてくれるの?」

勇者のコントロールは容易い。

わけがわからず混乱している隙に、ほっぺたへチユツ。あとは理不尽で不条理な屁理屈をまくしたてればよい。反論の余地は、時間的意味で許さない。

「命をかけた愛なのね?」

「そ、それは、それは、それは」

「さすがは勇者! 身をもって示そうとしたのでしょうか? そう、たしかに、今、人間と魔物は、お互いを傷つける時ではないわ。あなたは、殺されるとわかっていながら、それをこの剣でみんなに教えてくれたのね! なんて勇敢なの!」

「勇敢? そうなのか、え、そうなのか?」

「そうよね、柄と刃を分ければ、剣は人を傷つける道具にはならない。同じように、世界を二分して、それぞれ領土をわけた完全な住

み分けをすれば、お互い傷つくこともない。世界の半分が人間の国、もう半分が魔物の国」

「い、いや、それじゃ、俺たちの領土というか儲けが半分に」

「わかるわ。あなた、とても賢くて、やさしい人だもの！ 深謀遠慮の一つなんでしょ？ 平和を得るための」

持ち上げてやればノーと言えない単細胞。貴様の性格は把握している。

あたしは素早く勇者の耳元へ囁いた。

「さすが、あたしの旦那さま」

馬鹿が目を丸くする。

不意に、パパが叫んだ。

「なるほど！」

魔王の大音声は、戦闘のすべてを止めた。

「いかな心胆かと思据えておれば、刃と柄を分けることによって、人間の国と魔物の国、二分させるべしと示したのか！ 愚かにも、わしは勇者どのの知謀と慈愛を見通せなんだ」

ナイス、パパ。

「これほどまでにすぐれた知略、押し通す勇氣、勇者どののは真の人間の当主たる器であらせられるな」

もつと褒め殺して！

「そこにいる私の娘、アメリカの夫に相応しい」

勇者は驚きをあらわにあたしの腕を握った。

「まッ、魔王の娘だったのか？」

うつむいたあたしは、心の中で十秒数えてから、上目遣いに言った。

「ごめんなさい。言えなかったの、愛するあなたには」

チュツ。

勇者の顔が上気する。

オチタ。

あたしは会心の笑みを浮かべた。

純粹にまっすぐで貪婪な「欲望」

欲望に忠実でわかりやすい「行動力」

魚類にも劣る「知能」

これほど操りやすい男が、この世に二人といえるだろうか？

勇者の実態を知らない民衆は妄想的カリスマ性を彼に与えていて、彼自身の戦闘力は歴代最強の魔王に匹敵する。仲間はみな強く、しかも常識という枠に捉われない柔軟な思考の悪人だ。

あたしの頭脳が加われば、こいつを人間世界の霸王にしたてあげることも容易い。

もちろん、あたしが裏から糸を引いてこの馬鹿を操り、人間世界を支配する。

それは、実質、全世界をパパとあたし、二人の支配下に置くということだ。

「勇者さま……」

いとしい馬鹿に抱きついた。

たった今から、貴様はあたしのためだけのリーサルウェポンになるのよ。

ケケケケケ、オホーッホッホッホッホッ。

完

終章（後書き）

「主人公が聖剣を折る」というアイデアから、話を膨らませてみました。 >br < 快くアイデアを貸してくださいました作家様、アイデアを紹介してくださった方、心の底から大感謝いたします。 >br < 読んでいただき、ありがとうございました。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1966a/>

---

魔女の胸に抱く剣

2008年11月7日07時14分発行